－所蔵作品紹介－

大塚　哲郎　ŌTSUKA Tetsurō

まる

作品データはこちら

一見、籠のような形である。胴体部分はねじった桟材（薄い板）で作られており、上下はそのねじれを固定するストッパーの役割を果たしている。反動で全体がばらばらになるのではという予感さえひきおこすねじれと、がっちりと組み合わされた接合部との対比が生む緊張感が快い。

この緊張感の仕掛人は、ひとつはねじれに適した桟材の厚みであり、もうひとつは「組木」の技法だ。組木とは釘や接着剤を一切使わずにパーツを組み上げる技法で、小さな細工物から複雑で大規模な建築にまで応用できるため、日本伝統の指物技術の粋とまで認められている。紙や小さな木を素材にこの組木技法をいろいろ試しているうちに、思いがけない形に出会い、感動し、そこから本格的な制作にとりかかるのが作者の常だという。つまり彼は技を見せるための形ではなく、技から導き出される形を求めているのである。これは素材と手法が表現を導き出すという論理であり、20世紀の造形思考に一致する。伝統的な手法を通して発見され実現されるモダンな造形、ここに大塚の仕事の大きな魅力がある。

大塚哲郎は大阪府に生まれ、京都工芸繊維大学工芸学部を卒業後、1963年より北海道教育大学岩見沢校で教鞭をとる。同校に勤務してから独学で木工を始め、山中成夫の箱根組木細工の幾何学的・抽象的な形に惹きつけられて組木に取り組み、実用性と大きさを求めて工夫し、さらに実用性にこだわらない造形へと進んだ。道展、モダンアート展のほか、「あそびの木箱」展（1981、北海道立近代美術館。1987、北海道立旭川美術館）、「北の創造者たち'88」展（1988、札幌芸術の森。北海道新聞社賞受賞）、伊丹クラフト展（1991、伊丹市立工芸センター、伊丹工芸大賞受賞）などに出品。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より